

戦いは終わった

チツソ合理化

チツソ水保の合理化の戦いは終わった。その後長く路を引いていた三十七年の大争論の決着とみる人もいる。それはともかく、合理化では、多くの話題を提供した。配転反対、人員整理、自宅待機、退職金の会社借り上げによる新規事業建設、仲間を救うための賃上げガマンなど、どれをとっても、全国の労使が注目するような問題である。地域住民にも見のがせない問題だった。しかし、合理化と抱き合わせになっていた過疎対策は、今後のことであり、市民も注意深く見守っている。



工場に押しかけ就労を要求する自宅待機者（昨年4月22日）

市民の要望はいれられたか

チツソの合理化は、市の消長を決める、とまで言われていた。だから合理化が、単に労使関係だけ

ろ。しかし半面、労組からのきびしい労働条件の要求の「緩衝剤」にも利用できる性質のものだった。労組側も「新規事業を起す」、社会的責任を果たせ」というのが、要求の基調になっていた。だから労組も、二律背反するものを持つていたわけだ。市民の立場からと、労組の立場の二面。これと「分裂組合」も微妙に作用する。新、旧労組とも、市民への浸透にあらゆる手を使っている。

はつなだった」として、会社回答をのんだ。闘争態勢を整えながら、ストも打たずに解決したのは珍しい例。あつけない弊切れだった。力による対決を選ばなかったこと、市民の二つの願いはかなえられた。

ともかく、やがて地元からの新規採用も始まるだろう。過疎対策として「工場誘致を叫んでいるもの、進出企業が少ない市は、これを歓迎している。

地域振興か後退か

道分ける今後の労使

新生水保

の出発点

にとどまらず、当初から社会的問題としてとらえられてきた。市民も二時的な労使間の力の対決による解決を選ばないよう、強く望んでいた。この背景から市も、労組も、会社側にも要求した。市は「要請書」で、労組は地元からの新規採用などを盛り込んだ「要求」で、それぞれ話し合いをした。

会社側に見れば、地域振興を織り込んだ市の要請書は、企業再建とのかみ合わせに苦心した

市民の要求を読み取り、会社側にも認めさせようと努力する。これらの点から結局、四つの新規事業を起し、そこで約三百五十人の余剰人員を吸収させることに落ち着いた。しかし労働条件はチツソ並みとは言えない。ただ高かった。労組側はかつての炭鉱町にたとえ、企業の社会的責任を主張した。「失業対策事業を地元」に押しつけて逃げて行く「新規事業は二ツトリ小屋同然だ」など、しかし、一方では「新規事業の勝敗が合理化の決め手になる」表現もした。結局、新規事業の評価に落ち着く。会社側は「それぞれ業界トップグループとの提携だからつぶれるようなことはない」。これに対し「縮小撤退の中で、新規事業を育てよう」と考えているのかどうかわからん（旧労）。「むしろ育てよう」と努力すべきである（新労）と、立場の違いから、現在でも議論されている。

しかし一応、技術革新による企業の体質改善は、労組側も認めたかっこうである。三月末まで、カ1バインド工場を中心とした全工場ががりりと委わる。そして化学以外のものに手を出す。だが、これらの工場は、かつての立地条件など問題にしかった巨大な工場とは違う。阪路を九州一円、あるいは南九州を相手とみた工場のようなのである。

見方によつては、地域振興とも撤退とも受け取れるものである。チツソ労使がどちらを選ぶかによって「地域振興をめざす企業像」として新しい姿で出発することができ、またその道ともなりうるものである。

（西村）